

## 資料 8

### 1 今治市の小中学校の適正規模

#### 4 小中一貫校（義務教育学校）におけるメリット・デメリット（課題の抽出）

※「義務教育学校」とは

学校教育制度の多様化と弾力化を推進するため、小学校から中学校までの義務教育を一人の校長と一つの教職員組織が9年間の学校教育目標を決め、一貫した教育を行うことを趣旨とし2016年（平成28年）から制度化された新たな学校種のこと。

メリット	デメリット
<p>●中1の壁の緩和・解消・系統性を意識した小中一貫教育、異学年交流による精神的な発達が望める。</p>	<p>●リーダーシップや自主性を養う機会が減る（小学校高学年の時期）</p> <p>●9年間で人間関係が固定化しやすい。</p>
<p>●<u>義務教育学校の教育の特例【義務教育学校】</u></p> <p>通常の小中学校では「学びを保証」するため、各学年の1年間で学ぶ内容・時間等が法律で定められている。しかし、義務教育学校では、9年間を一つの「学びの場」と考えるため、指導内容や基準をかえることはできないが、子どもたちの実態や理解程度、また、9年間の指導内容の系統性を考え、指導する時期（学年）や指導時数を柔軟に考えることを可能とする「特例」が認められている。</p>	<p>●<u>小学校卒業の達成感がない</u></p> <p>義務教育学校の場合には小学校と中学校が1つの学校になるため、小学校卒業の達成感がなくなる。前期課程修了による修了式を行うことで卒業式を代替える場合もあるが、学校が変わる卒業式と修了式では達成感に差が生じる。子どもにとって1つの区切りを超えた、成長したと実感できる機会が減ることになる。</p>
<p>●<u>学年段階の区切りを6－3以外に柔軟にできる</u></p> <p>現在の学校制度では、学年段階の大きな区切りは必然的に小学校と中学校の「6－3」になるが、義務教育学校では9年間の中で独自の大きな区切りを設けて子どもたちの発達段階に応じて、効果的な教育課程を組み児童生徒の指導を行うことが可能。</p> <p>H27年度調査：「4－3－2」が57%、 「6－3」18%</p>	<p>●<u>中学校の新鮮さがない</u></p> <p>小学校と中学校の段差をなくすことで、中1の壁や小中ギャップと呼ばれる状況が解消されるが、段差をなくし1つの学校とした結果、中学校の新鮮さが失われる。新しい学校に通うことで、やる気が出たり、心機一転したり、人間関係が大きく変わったりするが、新鮮さがなくなり変化のきっかけの一つが失われる。</p>
<p>●<u>中1の壁・小中ギャップの緩和・解消</u></p> <p>小学校と中学校では学習・生活環境、人間関係などが大きく変化し、変化に対応しきれない中1の壁（小中ギャップ）という問題があるが、義務教育学校では、小学校と中学校の段差を解消でき、円滑な移行を促すことが可能となり、課題の緩和・解消が見込まれる。</p>	<p>●<u>人間関係が9年間固定化しやすい</u></p> <p>クラス替えがある場合においても、9年間同じ生徒構成で過ごすこととなり、人間関係が固定化しやすくなり、一度からかいの対象となる、弱い立場に追い込まれる、仲間はずれになるなどの立場となった場合、その状況が固定化され、立ち直る機会が得られない場合がある。</p>

メリット	デメリット
<p>●<u>柔軟性・連続性を意識した小中一貫教育</u></p> <p>小中一貫教育では系統的・継続的な学習によって教育効果が高まることが期待される。特に校舎一体型の義務教育学校では、教科内や教科間の関連性を意識した指導順序や指導内容を考えたり、児童生徒にとって理解が難しく、つまづきやすい内容は定められた学年以外でも繰り返し指導したり、関連性の高い内容については前の学年で時間を割いて重点的に丁寧な指導をするなど工夫が可能。</p>	<p>●<u>中学生相当の生徒の悪影響の恐れ</u></p> <p>一般的に中学生の段階になると、精神的に発達し、思春期・第二次反抗期にあたる時期となるため、不登校やいじめ、暴力事件などの問題が増えやすくなる可能性がある。中学生相当の行動や振る舞いが小学生相当の生徒の発達に悪影響を及ぼす恐れがあり、学校側の教育上の配慮が重要。</p> <p>※先進校では、中学生相当の生徒が逆に優しくなり、下級生の面倒見がよくなるという傾向も伺える。</p>
<p>●<u>異学年交流による精神的な発達</u></p> <p>小学1年生から中学3年生に相当する生徒が同じ学校で学ぶことから何らかの交流機会が持たれる（施設隣接型・分離型でも同様）。1年生から9年生までの生徒が学校行事を通じて異学年交流することで、上級生から下級生に対する思いやりの心、上級生・下級生の規範意識、下級生から上級生に対する憧れの気持ちなどの醸成が期待され、精神的な発達や社会性の育成効果も期待される。</p>	<p>●<u>リーダーシップや自主性を養う機会が減る</u></p> <p>学校集団の中で高学年（小学5・6年生、中学3年生）になると、学校行事などにおいて重要な立場となり、リーダーシップや自主性が養われる。しかし、義務教育学校では小学校段階の5・6年生は高学年ではなくなってしまうため、リーダーシップや自主性を養う機会が減ってしまう。</p> <p>※運動会など学校行事において、中学生ではなく5・6年生を主体に運営することで、リーダーシップを育む取り組みもある。</p>
<p>●<u>継続的な生徒に対する指導</u></p> <p>義務教育学校は小学校と中学校が1つの学校となり、9年間継続して生徒に対する指導を行う。そのため教員間で生徒の情報を共有しやすく、生徒指導が効果的に行うことができるようになる。生徒の個性に応じたきめ細やかな丁寧な生徒指導が可能となる。</p>	<p>●<u>小1と中3は差があり交流に課題がある</u></p> <p>義務教育学校では、学校行事など様々な学校活動を通じて異学年交流や学年の縦割り活動などが行われる。しかし、小1のような低学年と中3のような高学年では発達段階に差があり配慮が必要。</p>